

133 No. 13:高いと言えない本県知名度－マカオ対象にPR必要－  
(平成30年12月26日)

マカオと聞くと、何をイメージするだろうか。  
「東洋のラスベガス」と称されるカジノだろうか。それとも、ヨーロッパと中国伝統の文化を感じさせる世界遺産の街並みだろうか。

マカオは、中国大陸南岸の珠江河口に位置するポルトガルの元海外領土であり、1999年12月20日にポルトガルから中華人民共和国に返還された。正式名称は中華人民共和国マカオ特別行政区。面積は約30平方キロメートルで野木町とほぼ同じ。人口は約65万人で、宇都宮市と足利市を足したくらい。世界有数の過密都市である。

また、2018年度版のフォーブス・トラベル・ガイドでは、5つ星ホテルの数がパリ、ニューヨークを抜いて世界一になった。マカオには5つ星ホテルが12軒もある。

そんなマカオの人たちが選ぶ旅行先は、タイ、シンガポールそしてマレーシアが定番であったが、2013年以降、日本が人気となっている。もともと親日であったことに加え、特にウィンターシーズンは美しいイルミネーションなど、クリスマスムードを味わえることが、日本を選ぶ大きな理由の一つのようだ。

また、日本の自然や食が大好きなリピーターも多い。去年は約11万5千人、マカオの人たちのおよそ6人に1人が訪日した。訪日旅行は他国への旅行に比べるとやや割高だが、1人当たりGDPが日本の約2倍（7万7千ドル）で、1人当たり平均所得も日本を上回ることから、価格の高低ではなく、しっかりとした目的意識を持って旅先を選んでいる。

こうした中、マカオ半島にある澳門塔石広場において、12月8日、「澳門日本文化祭」が開催された。栃木県としてのブース出展はなかったが、北海道、山形県と連携しながら観光パンフレットを配布し、本県の魅力をPRした。ただ、本県の知名度は高いとはいえ、「日光の中に栃木県がある」といった誤解をしている来場者がいたほどである。

10月24日には、香港とマカオ、珠海を結ぶ世界最長の海上橋「港珠澳大橋」が開通し、ヒト、モノ、カネ、情報の流れがますますダイナミックになることが確実な今、便数の多い香港発着を選ぶマカオの人たちの増加を想定し、香港の航空・旅行業界は大きなビジネスチャンスと捉えている。本県においても、マカオを対象とした観光プロモーションが必要なのかもしれない。

毛塚 隆弘(けづか たかひろ)

栃木県香港事務所所長。

1993年県庁入庁。産業政策課、国際課などを経て日本貿易振興機構（ジェトロ）に出向。2017年4月から現職。栃木市出身。



【今月8日のイベントの様子】